

2つの「想像の共同体」の狭間で
—都市暴動と在仏マグレブ移民第二世代にとっての「故郷」—

渋谷 努*

Between Two 'Imagined Communities'
Riots and 'Home' for 2nd Generation of Immigrants from North Africa
in France

SHIBUYA Tsutomu

This paper analyzes how second generation of immigrants from North Africa in France imaged their 'home' and how relatives in home regarded them.

Some second generations regarded themselves excluded neither from French society nor from S village in Morocco. They were not recognized as members by two 'imagined communities' as host society and home society and they also thought that they didn't belong to these societies. So to speak, they fell into loophole between two imagined communities and couldn't find out their roots anywhere. Double deracination made their lives in France unstable and I think that this deracination was one of factors that forced young men concluding second generation of immigrant to riot in suburbs.

キーワード

移民第二世代、想像の共同体、故郷、都市暴動、ノスタルジア

I. はじめに

2005年10月27日、パリの北東郊外クリシー・スー・ポワで、少年たちが工事現場のプレハブの側にいるのを近隣住民が見つけ、警察に通報した¹。警官は通報から5分後に現場に到着した。駆けつけた警官たちは、少年たちが押し込み強盗の最中と判断した。そこで、警官は少年たちに対して職務質問を行った。警官の追求から逃れるため3人の少年が電力公社の高電圧所に逃げ込んだ。その内2名が感電死した。2人の少年が警官の職務質問から逃れるために高電圧所に追い込まれ、そこで感電死したという情報は、2時間後には市内の若者たちに広まり、車への放火が始まった。

暴動はパリ郊外から全国に拡大し、11月5日と6日の夜には全国でそれぞれ1300台から1400台の自家用車が燃やされ、300人から400人の逮捕者がでた。この間に商店、郵便局、小学校などの

*東北大学文学研究科 専門研究員

2つの「想像の共同体」の狭間で

公共施設が破壊された。また、事件当初は、各地で警察と若者たちとの衝突があった。

暴動がほぼ終息した11月17日の警察の発表によると、10月27日以降の被害報告では、放火された乗用車の台数は9071台、逮捕者は2921人で、そのうち三分の一以上が未成年者だった。そして、警察官と憲兵隊合わせて126名が負傷した。私が調査をしたモロッコ出身移民の子供の中にも、「暴動」に参加した者がおり、そのうち3名は警察署に連行された。

郊外地域での若者による放火や暴力事件は、今回、突然起きたものではなく、1980年代以降、今回ほど規模が大きくなることも、郊外地域で慢性的に起きていた (Bauer et Raufert 1998[2005])。フランスのメディアの報道や研究者のコメントも、今回の事件を例外的なものではなく、移民や郊外地域への差別という構造的な問題が、火や暴力といった象徴的かつ可視的に顕現したものと論じた。

これまでに起きた都市暴動を分析した研究は、郊外地域での若者による暴力行為が起きた背景として失業・経済問題、学校教育、さらに日常生活での差別の問題を指摘した。経済に関して言えば、Beaudらの調査によると、工場の現場では、現場監督はもっともきつい仕事を、採用という「ニンジン」をちらつかせて臨時雇用されている郊外地域の若者にあてたが、工場側は臨時雇用者を正規雇用にすることはなかった。このような社会的に構築されている差別的な眼差しに、暴動が起きた一要因があると Beaudらは論じた (Beaud et Pialoux 2003)。

その一方で、教育の問題を指摘する研究者もいる。郊外地域に住む若者たちの一部は、学校を社会的上昇のためのものと見なさず、彼らの社会的運命を悲惨なものにする選別の場と見なしていた。彼らの観点からいえば、学校による上昇は他の者、すなわち一般的に「白人」に限定されていた (Dubet 1987)。学校教育の場面でも、郊外地域の移民の子供たちはフランス社会の中からの否定的なイメージを通してしか自分を見ることができず、自分の将来を期待することができなかった。

Lapeyronnieは、都市暴動に見られる暴力は、人種差別と切り離すことはできず、暴動の起きた背景にはフランス社会に内在する差別によると論じた (Lapeyronnie 1999)。郊外の若者たちは世論を異質なもので攻撃的なものと捉えた。差別的なまなざしは、2005年の暴動に拍車をかけたと言われるサルコジ内相の次の発言に端的に示されている。「こんな racaille にはうんざりでしょう。ならず者はケルヒャーで掃除する。」この内相の発言には、国内での「われわれ」と「彼ら」という区別を見いだすことができる。郊外の若者たちは、フランス社会からの眼差しを、自分たちへの攻撃と捉え、都市での暴動はそれへの反撃・復讐だった。

以上見てきたようにフランス都市部に見られた暴動の背景として指摘されてきたのは、特に大都市郊外に住む移民及びその子供たちに対して、労働、教育、社会のそれぞれの場面で差別的なまなざしが向けられ、大都市郊外がいわば差別の空間 (Wieviorka 1991) となっていた点である。

大都市郊外に住む若者、特に本稿で取り上げるモロッコを含む北アフリカ出身移民の子供たちは、フランスという「想像の共同体」(アンダーソン 1997)の外部に位置づけられているといえるだろう。ベネディクト・アンダーソンは、

国民はひとつの共同体として想像される。なぜなら、国民の中にたとえ現実には不平等と搾取があるにせよ、国民は常に、水平的な深い同志愛 (comradeship) として心に思い描かれるからである。

と論じた。

そこで「想像の共同体」が成立するには、村落や親族集団といった、お互い顔を見知った親密な関係を越えて、地理的・社会的に離れている他者、たとえば移民を、成員が同じ「共同体」に属する仲間と想像することが必要となる。

アンダーソンによる「想像の共同体」という概念を、移民とホスト社会及び彼らの故郷との関係に当てはめると、2つの問題点が浮かび上がる。第一に、ホスト社会、本稿の場合、フランス社会は移民たちを自分たちの共同体の一員と想像しており、移民たち自身は自分たちをフランス社会の一員と想像しているのか¹⁴。第二に、移民たちは、自分自身を出身社会の一員と想像しており、故郷に住む者は、移民たち、特に第二世代¹⁵を一員として想像しているのかという問題である。これまでの都市暴動に関する研究では、先ほど提示した中で一点目、つまり都市郊外に住む移民の子供たちが抱えている問題をフランスという一つの「想像の共同体」の問題に限定し論じていた。

しかし移民第二世代の若者の生活範囲はフランス社会にとどまらなかった。故郷に住む人々（本稿では中部モロッコに位置するサメル村¹⁶）との国境を越えた関係が、第二世代の日常生活や帰属意識にとっても少なからず影響を与えていた（渋谷 2005）。そこで、郊外に住む、特に移民の子供たちの行為や帰属意識を分析するには、第二世代と故郷との関係を考察する必要がある。

故郷をアパデュライは「部分的に創られたものであり、脱領土化された集団の想像力の中のみ存在している。」と論じた（Appadurai 1998:49）。つまり現代における故郷とは、異国や都市部といった出身村から離れて住む者が、自分たちの起源を求めて想像するイメージであり、郷愁の対象である。

本稿では、移民第二世代が夏のバカンス期間に行う「帰省」に関する私の調査結果を概略した後、アンダーソンとアパデュライの議論を踏まえて、移民第二世代が「故郷」をどのように想像し、出身村に住む者が彼らを一員と見なしているかという相互関係を考察する。

本論で用いるデータは、私がフランスの首都圏である Ile-de-France で 1997-98 年、及び 2003 年 2-3 月、2004 年 2-3 月にかけて、村出身者が構成する 47 世帯を対象に行った調査、及び 1998-99 年にモロッコのサメル村 21 世帯（村に於ける全戸数）及びモロッコ内の都市フェス 40 世帯で行った文化人類学的調査で得た資料に基づく。

II. 移民の現状

1999 年現在、パリ及びその周辺に住むサメル村出身者は、本人が渡仏した者、親が村出身で国内都市部で生まれ育ち渡仏した者、フランスで生まれた者を含めて 147 名だった。その内訳は、労働者が 62 名、彼らの家族が 67 名、そして留学生として滞在している者が 18 名いた。彼らの多くは、治安が悪く移民が多い地域として知られるパリ周辺の「郊外」地域やパリ市内の各区に住んでいた。彼らは複数世帯が同じ地区に集まって暮らすことが多かった。

サメル村出身者の職業を見ると、彼らが最も従事しているのは建築業であり、就労者全体の 39% に及び、続いて工場勤務が 30% だった。そこで、サメル村出身者の中で単純労働に従事している者は就労者全体の 70% 近くを占めた。しかし、移民の高学歴化と第二世代の成長とともに職種にも変

2つの「想像の共同体」の狭間で

化が生じ、わずかではあるが「ホワイトカラー」の職種につく者もいた。4人が作業管理や製品管理に就いており、2人が建築現場の監督を務めていた。さらにフランスの大学を卒業した後にフランスの企業に入社した者は9名に達した。その他に教員として働いている者が3名いた。

移民第一世代は、フランスで生活するようになってから、同村者や同地域出身者の間で緊密な相互扶助関係を発達させた。女たちを中心にお互いの家を訪問し、男たちは同地域出身者が集まる喫茶店に頻繁に通い、情報交換を行った。さらに、彼らは近隣に住む者とも密接な相互扶助関係を築いた。

近隣に住む人々の間では、うわさを用いて周囲の人々を評価し、不正行為があった時には非難する事があった。第一世代はこのような親密な情報交換とうわさによる相互監視を通して、出身地の異なる人々との凝集力を高めた。相互監視は、フランスで生まれ育った子供たちにも向けられた。飛び地で生活する中で、高学歴者及び第二世代は、近隣集団やカフェで交わされるうわさによって、異性間関係が攻撃された。彼らは私生活が暴露され悪意を持って曲解されて、行動が抑制され自由に振る舞えないと不満に思っていた。さらに彼らは、移民社会の中での男女関係がもろく表面的で半ば存在していないのは、うわさが私生活を暴露しかねないことが理由と考えていた。

ここでは、周りに注意をしないで男は女の子と話をすることさえできない。私、私は町の中を女の子と一緒に歩いたことなんてない。(ムスタファ 第2世代 23歳) こうして第二世代の大部分は、フランス社会の中でマグレブ出身者による飛び地の中で育った。

Ⅲ. バカンスと帰省



図1 モロッコ関連地図

以下では、私が、サメル村出身の第二世代に対して行った帰省に関する調査結果をまとめたものに基づき、第二世代の帰省について論じる。調査内容は2003年で10才から25才のパリ郊外に住む二世世代の総数である17名、そのうち男性が7名、女性が10名を対象に、1995年から2002年にかけてサメル村に帰省した回数に関するアンケートを行った(表1を参照)。

第二世代が7年間で帰省した例は47例で、1人平均で2.7回となり、平均で2.3年に一回は帰省していた

ことになる。ただし、7年間の間、毎年少なくとも一回は帰省している者もいれば、一年に数回帰省している者など、頻繁に村を訪れている者がいた。それに対して7年間の間に一度も帰省したことがない者も3名いた。

表1 第二世代の帰省状況：1995-2002年

帰省回数	0	1-3	4-6	7-
人数	3	9	2	3

移民の帰省を見た場合、帰省をするかどうか、さらに滞在期間を決めるのは移民第一世代であり、第二世代は親に連れられてモロッコに行った。そこで、第二世代が帰省

するかどうかは、親の経済状況や長期の休暇が取れるかどうかと言う仕事の都合で決まることが多かった。

第一世代とともに第二世代が帰省の際に立ち寄り出会う人々は、出身村に住む者に限られてはいなかった。移民たちが帰省している6-8月のバカンス時期は、海外からだけではなく、国内都市部からもサメル村を訪れる者が増えた。

メクネスで庭師を行っているムハンマドは、同年に2回、村に行った。

[1998年に] 村に帰ったのは、8月の結婚式の時と2月にオリーブを収穫する時だった。この時には毎年帰っている。他の年だと、もっと帰るときもあるが、今年はあまり休みが取れなかった。8月に結婚式が行われる時はいつでも帰っている。結婚式には出なければならぬから。それにオリーブの収穫の時だって、弟だけにやらせることはできないだろ。だから、オリーブつみを手伝いに行くのだ。

海外からの移民が、サメル村で出会うのはその土地に住んでいる者だけではなく、このような他の都市から来た者も含まれている。

移民やモロッコに住む親族が集まるバカンスの期間は、伝統的に結婚式を行う時期であり、調査当時でも変わらなかった。さらに、かつてはこの夏の期間以外にも行われていた割礼や婚約式などの儀礼も集中的にこの時期に行われた。サメル村では、割礼は生まれてから一年以内に行い、様々な季節に行われていた。婚約式の場合は、結婚の半年ほど前に行うのが慣例となっていた。婚約から結婚への期間が長期化するとともに、婚約式は結婚式の半年前ではなく、8月に行われることが増えた。このように、バカンスの時期は、伝統的に行われていた結婚式だけではなく、婚約式や割礼式も行われるようになり、モロッコ国内や海外に住む移民たちを、この時期に帰省させる一要因となっていた。

IV. 第二世代と故郷：ノスタルジアと反感

第二世代の帰省を見ていくと、彼らの中には、一方では親と一緒にではなく1人で、または友人と帰省する者がいた。しかし、他方では、親から帰省を提案されても、頑として拒絶し、親だけが帰省し自分はフランスに残った例もあった。このように第二世代の中では、故郷との関係に大きな差異を見いだすことができた。2003年の調査では、上記の調査と同対象に対して村に対する印象の聞き取り調査を行った。そこから得られたイメージをまとめたのが以下の表2である。

サメル村出身の第二世代が抱いたサメル村のイメージを、大きく二つに分けることができた。一方には、村に対して肯定的なイメージを付与しており、フランスに戻ってから故郷に対してノスタルジアを感じている場合だった。他方には、村に対して否定的な印象しか与えておらず、反感を感

2つの「想像の共同体」の狭間で

表2 第二世代のサメル村へのイメージ

ノスタルジア			反感	
言語	自然	イスラーム	不便	不快
6	2	4	8	10

じている場合だった。特に年長になっても親とともに帰省したり、1人や友人とともに帰省したことがある者は、村の言語や自然に対して強い愛

着を感じていると答えていた。それに対して、村に行く回数が少ない者の多くは、村に対して不便や不快さといった否定的な印象を抱いていた。

ただし、この調査結果で出している数字は、延べ数であり、同一人物が村に対して好印象を抱いていながら、否定的な印象を回答する場合も含んだ。そのため、第二世代が村に与える印象は、好印象か悪い印象かのどちらかに偏っている場合は少なく、両者が入り交じっており、曖昧な状態にいる場合が多かった。

移住第二世代の者は、故郷であるモロッコのサメル村に対して、上の表で示したように様々なイメージを抱いていた。その一つの現れとして、モロッコへ向かうことをどのように語るかという点を本稿では注目したい。私がインタビューした多くの子供たちは、帰省でモロッコに行く (Je vais au Maroc) という表現を用いた。それに対し、わずかな人数ではあったが、モロッコに帰る (Je rentre au Maroc) という者もいた。

これは些細な表現の違いかもしれないが、この表現の違いには第二世代の帰属意識を示していると考えられる。つまり、フランスに対する帰属意識が強い者は「行く」という表現を用い、モロッコに対しての方が強い者は「帰る」という表現を用いるといえる。「故郷」は、個人の故郷との関係のあり方とそれに関する語りの総体であり、個人の故郷への感情を規制している (成田 1998)。つまり、成田が論じているように、移民第二世代の故郷に関する語り方が、彼らの感情を規定し、かつ表現したと考えられる。

以下では、移民第二世代の帰省について、モロッコに住む者が彼らをどのように受け入れているのか、さらに第二世代の者はモロッコに住む者やモロッコをどのように受け入れ、モロッコに対して帰属意識を抱いているのかを論じる。

V. 村へのノスタルジア

以下では第二世代の中でモロッコに帰省することを村に帰るという表現をする者と村に関わるもの、特にサメル村で話されているタマジルク語、自然環境、さらにイスラームとの関係のあり方とその語り方に注目する。

言語に関して言えば、フランスに住む者もモロッコ国内の都市部に住むサメル村出身者も、ほとんどの場合、家族内の会話はモロッコ方言のアラビア語かフランス語を用いた。そこでフランスで生まれ育った子供たちは、都市生活においてタマジルク語にふれる機会はほとんどなかった。

98年に、コロンボに住む第二世代のアーティフがタマジルク語を勉強し始めたきっかけとなったのも、村に「帰った」ことだった。

村の夏の間、みんな[男性]が家の外に出て星を見ながら話をした。伝説やうわさなど。それはタマジルク語で話されるから、はじめは理解できなかった。そのころは[オジの]ラッセンがフランス語に直してくれた。それに他の時でもみんながタマジルク語で話しかけてきたのだ、そうすると、私は分からないから、それを見て皆が笑うのだ。悔しかったから、タマジルク語を勉強し始めた。

アーティフにとって、村は語学学校だった。

毎年村に帰るだろ、その時にことばを覚えていった。名前を一つ一つ、イディオムを一つ一つ覚えていった。道を歩いているときに一つ一つ指さしながら、ものの名前を聞いた。「これはなんて言うの」ってね。そうしたらみんな親切に教えてくれたよ、何てったって村は一つの家族みたいなものだから。

アーティフが村に滞在しているときに、カサブランカから彼と同年代の都市移民の二世世代が村を訪れた。後者は村に来たのが初めてであり、タマジルク語を全く理解できなかった。彼に対してアーティフは通訳をかってでた。村の者が話したタマジルク語をフランス語やアラビア語に変えて説明した。そして誇らしげに、タマジルク語の方が羊を指す語彙がアラビア語よりも豊富であると自慢し、村の唄は自分たちの感情を適切に表現しているといった。

アーティフのように、村に「帰る」ことをきっかけとしてタマジルク語を覚えた移民の子供たちがいた。多くの者は、親や兄弟に連れられて村に行き、そこで単語を覚え、フレーズを覚えて少しずつ村の人々が話していることを理解できるようになった。そして、フランスで同郷者と会うと、タマジルク語の単語を差し込みながら会話をした。言葉を覚えるまでは、二世世代の多くは、村に集まっている出身者からかわれることが多く、異邦人扱いされていた。しかし、タマジルク語を覚えることで、彼らは徐々に成員として認められるようになり、それが彼らにとっても自信となり、故郷を共有する集団への帰属意識を高めていった。

また、子供たちの中には、村の周囲にあふれる自然環境を誇りにしている者がいた。パリ郊外に住むイシュマエルは、このように語った。

ここ[コロンボ]は空気がまずいし、水も飲めたものではない。人は多いし緑は少ない。僕たちが車に気をつけなくても遊べるところだって、見つけるのが大変だ。だけど、村には自然がある。山があって川があって。動物だってたくさんいる。羊、山羊、ろば。山にはウサギだっている。

彼は村の自然環境と村での同村出身者との交流を以下のように語った。

村では、夜になると男たちは外に出て話をする。空にはきれいな星が輝いている。村は空気がきれいだし、電灯の明かりがつかないから、ここよりも星がきれいに見える。星空のもとで夜遅くまで語り合うのだ。

このように子供たちの中には、村の恵まれた自然条件を誇りに思っている者もいた。それは、彼らがフランスで知り合った友人を村に連れてくることから伺えた。ノンテールに住むアブデュッラーは、今までに2人のフランス人をサメル村まで連れて行った。

大学で知り合った友人を、1995年の夏休みの時にサメル村に連れて行った。そうしたら、友人

2つの「想像の共同体」の狭間で

はこんなに自然が美しいところなのか、と驚いていた。彼にとっては湧き水を飲むことも美しい星空を見ることも初めてだった。私も、彼にそういう体験をさせたくて連れて行った。

故郷に対してイスラームのイメージを投影する者もいた。1980年代にフランスで起きたスカーフ事件からもわかるように、移民第二世代へのイスラームの浸透が見られた。第二世代のイスラームの浸透は、サメル村出身者にも見いだすことができた。フランスで生まれたスカエナは、日々の礼拝を欠かさず行う熱心なムスリムだった。彼女は村に対して、フランスに比べて格段にムスリムが生活しやすいという肯定的なイメージを抱いていた。彼女は2002年には、断食をサメル村で過ごせるように帰省していた。村では、周りが皆ムスリムだからとても生活がしやすかった。食べるものにも気を遣う必要はない。(スカーフをしても)周りの目を気にすることもなかった。

湾岸戦争やイラク戦争以降、フランス社会でもイスラームに否定的な論調が目立つようになった。9.11のテロ以降は特にイスラーム過激派への否定や嫌悪を報道することがあった。さらに2004年にライシテを徹底するための法律が成立したことから、学校にスカーフをしていくことが禁止された。フランス社会とイスラームとの緊張した関係の中で、熱心なムスリムである第二世代の中には、自分がムスリムであることに何ら問題が生じない故郷に親近感を抱いていた。

移民第二世代の中には、故郷の言葉や自然、宗教を通して同村出身者との密接な関係を感じており、フランスに戻ってからも村に対してノスタルジアを抱く者もいた。デーヴィスは、異郷に住む者にとってノスタルジアの重要な役割は、現在の自己に対し『あのことと同じ』なのだ、自分には価値があり、能力があり、行く手に待ち受ける恐怖や不確実性を完全に克服できるのだと元気づけ、アイデンティティの連続性を意識させることと論じた(デーヴィス 1990: 59)。

第二世代にとって、故郷へのノスタルジアによって、フランス社会で経験する差別という「否定的なものの封じ込め」に長けているだけではなく(デーヴィス 1990: 56)タマジルク語の習得やイスラームの正当性、さらに村人や親族による成員としての承認により、自分を肯定的に捉えることができた。

上記のように移民第二世代には、モロッコ特に出身村を肯定的に受け入れ、自分のアイデンティティの拠り所としている者もいた。フランスからの排除の眼差しを受けている彼らにとって、フランス社会に、物質的・精神的に恵まれた未来像を持つことができず、十全な帰属意識を持つことができずにいた。そこで、彼らにとって、「故郷」は自然や生活環境の点からフランス人に対して誇れるアイデンティティの源泉であり、帰省は同村出身者から「共同体」の一員として承認される機会だった。

VI. 村への反感

第二世代の中には、村への帰省さらにはサメル村に対して否定的なイメージを抱いていた者がいた。

カサブランカから3年前にリヨンに移住したハリッドが村に行き始めたのは、リヨンに来てからだった。彼はそれまでに村に行ったことはなかった。ハリッドは最初に村に行ったときの感想をこのように語った。

はじめて[サメル村に]行ったときは、何だここは、何もないじゃないかと思った。電灯もなくテレビもない。映画館もない。村にいる間は一日中退屈だった。しかも皆が話していることを理解できなかった。あまりいたくなかった。でも、父親の車で来たから勝手に帰るわけには行かなかった。

最初の印象は調査当時でも続いており、彼は村に長期滞在したがらず、家族をおいて一人で帰りたいと願ったこともあった。

村にいてもつまらない。結婚式があるときは[村に]滞在していてもいいが、それ以外は退屈だから、早く帰りたい。リヨンには友達がいる。

ハリッドが言っているように、彼ら第二世代を村に近づかせない要因は、村の生活環境の悪さにあった。村には娯楽施設どころか電気も通っておらず、水洗トイレがない家もまだあった。インフラストラクチャーが整ったフランス社会に生まれ、または幼い頃から生活している第二世代の者の中には、劣悪な環境でたとえ短い間であっても生活することを好まなかった。

村の不便さを、フランスとモロッコの国家間の経済的・政治的力関係に結びつける者もいた。

ここには何もない。とても貧しく仕事も見つけられない。このような貧しさが、フランスの人々がマグレブをバカにすることになるのだ。

パリ郊外に住む第二世代のフアッドの語りにあるように自分たちがフランス社会で受けている差別の原因となっているのは、故郷の貧しさにあると考えている者もいた。

さらに、移民第二世代の中には、モロッコ都市部や出身村での周囲の者からの否定的なまなざしを感じている者がいた。モロッコに住む者の多くは、フランスの移住者、特にその子供たちを、フランサーウイと呼び、自分たちとは異なる者と見なす者が多かった。「フランサーウイ」とはモロッコ方言アラビア語でフランス人を意味するが、フランスに住む移民たちがモロッコに住む者から見て過度に「フランス化」していると見なした場合に、自他を区別し、相手を否定的に呼ぶ場合に用いた。彼らが第二世代に見いだすフランサーウイとみなす属性は経済的、宗教・文化的なものがあつた。

モロッコに住む者が、フランサーウイに付与する経済的特徴には、モロッコに対してフランスの持つ経済的な優位さがある。子供たちが着たり履いている Nike やリーヴァイスといったブランド品に対して妬む者がいた。

フェスに住むサイドは、帰省中の第二世代のジーンズを見て言った。

彼の履いているジーンズは、本当のリーヴァイスだ。モロッコで売っているのは、リーヴァイスのロゴが入っていても、偽物しかない。(本物を)持つことができるのは、フランサーウイの特権だ。

サイドが語っているように、モロッコに住む者は、フランスから帰省している第二世代の衣服、CD プレーヤーやデジカメといった電気機器を見ることで、フランスとモロッコとの間にいまだある経済的差異を見だし、彼ら第二世代をフランサーウイと名付けることで自分たちとの差異を明確にしていた。

モロッコに住む者は、第二世代の子供たちをフランスで教育を受け「フランス化」していると考

2つの「想像の共同体」の狭間で

えた。そこで、彼らは第二世代が村や都市部に滞在している時に、屋外で自由に話をしているところを見るとフランサーウイと批判した。特に第二世代の女性の中には、村人が彼女たちに向けた蔑視を感じる者がいた。

蔑視と排除の経験が彼女たちに村に対する嫌悪感を抱かせた。フランスのノンテール市に住むノラは、数年前に村に行った際に自分のことを指さしてうわさしている者がいたと語った。ノラは、フランスの企業で働いており、そのことに関して悪いうわさをされたと考えた。

私がフランスに住んでいるからと言って、ここでは皆が、私がなにをするかと監視している。フランスに住んでいても、私はモロッコでの女性の振るまい方を知っている。だからTシャツで外に出るなんてことはしなかった。

リヨン郊外に住むブスハは以下のように語った。

村の人たちは、私たちのことを悪く考えすぎている。働いているからといって、みんなが半袖の服を着て、化粧をして町の中を歩いているわけじゃない。それなのにフランスに住んでいるからといってみんなを悪くいうことはできない。

村では、女性が家の外に出ることを恥ずかしい行為と見なした。そこで村に遊びに来ている女性が、家の外に出て話をしたり遊んでいるのを見て、村の男たちは恥ずかしい行為と見なした。そこで女性たちは、村人から汚れたものを見るような視線にさらされ、悪いうわさを受けた。

彼らは、フランスで人種差別を受けた経験や移民の「飛び地」での体験から、フランス社会と同様にモロッコや出身村も否定的なイメージに捉えるようになった。

ここも[サメル村]、うちの近所と一緒だ。皆が私のことを監視している。私があたかも罪人のように。

彼らは、フランス社会や移民の「飛び地」内で否定的に扱われていると感じており、そこに自分たちの居所を見いだそうとはしなかった。そして、フランスでの生活と同様な扱われ方をする、サメル村やモロッコにも、自分たちの居場所を見いだすことはできなかった。そのことが、彼らを村から遠ざける要因となった。

第二世代が抱いた故郷へのイメージは、ノスタルジアまたは反感と、大きく二つに分けることができた。一方で、第二世代の中には、フランス社会という「差別の空間」で、みずからを孤立した異邦人と感じていた。彼らは、フランスでの生活を憂鬱なものと感じ、「まさにそのことから、自分が市民であるもう一つ別の町、別の祖国…に強く結ばれていると感ずる。」(ジャンケレヴィッチ 1994:374) 第二世代の中には村やモロッコ都市部に住む者が、自分たちに親しく接し、言葉や昔話を教えてくれ、家族の扱いをしてくれたと感じた者がいた。フランス社会の中で排除のまなざしを受けている第二世代にとって、村への郷愁は、村で過ごしたときに自分の存在が承認されていたことを想起させ、アイデンティティの拠り所となった。

他方で、第二世代の中には、故郷に対してノスタルジアを抱くことなく、反感を抱く者もいた。第二世代の中には生活環境の悪さや経済的貧困をあげて村に帰ることを好まない者もいた。彼らにとって、故郷の貧しさは自分がフランス社会で受ける差別を生み出す一要因であり、彼らの故郷を含むモロッコがフランス社会と持つ歴史的関係、特に植民地支配という過去の遺産が現在の差別を

生み出すと見なす者もいた。さらに第二世代に対する蔑視や「フランサーウイ」とカテゴリー化されることから、村に対して否定的な意見を持つ者がいた。第二世代の中にはサメル村を、故郷とは見なさず、不便で不当な扱いをされるところと捉える者がいた。彼らにとってモロッコや親の出身村は、フランス社会と同様に、彼らを排除する社会だった。

VII. おわりに：移民第二世代と二重の「根の喪失」

本稿で明らかになったことをまとめよう。第二世代は、これまでなされた都市暴動に関する研究成果からも明らかなように、職場や学校、さらには様々な日常生活の中でも様々な差別を体験していた。また、彼らは、メディアや一部の政治家の発言などから、フランス社会が抱く郊外地域や移民に対する否定的なイメージに触れていた。移民達はフランス社会で自分たちのおかれた位置が周辺的であることを感じた。

第二世代の子供たちにとって、故郷での経験がフランス社会での自分の不安定な自己の拠り所となることがあった。彼らにとって故郷は、彼の地に住む人々から成員として受け入れられ、フランスでの生活では得られなかった集団への帰属意識を得ることができた。故郷へのノスタルジーは、自分のアイデンティティの拠り所となり、アイデンティティの連続性と尊厳を得ることができた。

しかし、第二世代の中には、フランス社会と同様に故郷に対しても帰属意識を得られない者がいた。その中には、故郷の生活環境の悪さから、故郷で過ごすのを嫌う者がいた。故郷を含むモロッコの経済的な弱さやフランスとの歴史的力関係が、現在の差別を生んでいると考えていた。

さらに第二世代の中には、故郷に住む者からも、フランス社会と同様に差異化のまなざしを受けていると感じた。故郷に住む者から、フランサーウイと呼ばれ、自分たちとは異なるものと見なされた。そのような差異化のまなざしを受けて、第二世代にとって故郷は、もはやノスタルジーの対象となることはできず、彼らが故郷に帰属意識を抱くことはなかった。彼らにとって、帰省とは故郷とのつながりを確認する機会にはならず、逆に自分が故郷へのノスタルジーを共有できない者とカテゴリー化され、自分が故郷を共有する「共同体」から排除されていることを確認する機会となった。

最後に、都市暴動の問題と移民第二世代の故郷との関係について考察しよう。第二世代の中には、現在生活しているフランス社会にも、自分たちの出身の地であるサメル村やモロッコにも排除されていると考える者がいた。彼らはホスト社会、及び出身社会という二つの「想像の共同体」から、成員として認められず、さらに彼らも自分がどちらの共同体にも属していないと想像していた。いわば、彼らは二つの「想像の共同体」の狭間に落ち込んでおり、どちらにも自分の「根」(ルーツ)を見いだすことができなかった。このような二重の根の喪失が、第二世代のフランスでの生活を不安定なものとし、それが第二世代を含む若者たちによる都市暴動を引き起こした一つの要因だろう。

2つの「想像の共同体」の狭間で

注

- ⁱ 以下の事件の概要は、Le monde及びLiberationの10月28日から11月8日までの記事に基づいている。
- ⁱⁱ 移民とホスト社会との関係については渋谷2005で一部触れたが、詳細な議論は別稿に譲る。
- ⁱⁱⁱ 本論では、第二世代の中にはフランスで生まれた第一世代の子供だけではなく、親とともに幼年時代(本稿では10才未満とした)にフランスに渡った者も含めた。彼らは、大部分の学校教育をフランスで受けており、多くの者がモロッコ方言アラビア語よりもフランス語の方を流暢に話した。
- ^{iv} 以下で用いる村名や人名は、プライバシー保護のため仮名にしている。また人名の表記については、正則アラビア語発音ではなく、インタビュー時の発音に近い形にした。
- ^v 村の多くの男性はモロッコ方言アラビア語を話すことができる。

引用文献

- Appadurai, Arjun 1996 *Modernity at Large*, Minneapolis, University of Minnesota Press.
- Bauer, Alain et Raufer, Xavier 1998[2005] *Violences et insécurité urbaines*, Paris, Presses universitaires de France.
- Beaud, Stéphane et Pialoux, Michel 2003 *Violences Urbaines, Violence sociale*. Paris, Fayard.
- Dubet, François 1987 *La Galère : Jeunes en survie*, Paris, Fayard.
- Lapeyronnie, Didier 1999 Violence et Intégration Sociale, *Hommes et Migration*, N1217, p43-54.
- Wieviorka, Michel 1991 *L'espace du Racisme*, Paris, Seuil.
- アンダーソン ベネディクト 1997 (1991) 『想像の共同体』(白石さや、白石隆訳) (by Benedict Anderson, *Imagined Communities*, London, Verso) 東京、NTT出版。
- 渋谷 努 2005 『国境を越えた名誉と家族』、宮城、東北大学出版会。
- ジャンケレヴィッチ ヴラジミール 1994 (1974) 『還らぬ時と郷愁』(中澤 紀雄 訳) (by Vladimir Jankélévitch ; *L'irréversible et la nostalgie*, Paris, La librairie Ernest Flammarion)、東京、国文社。
- デーヴィス フレッド 1990 (1979) 『ノスタルジアの社会学』(間場寿一、萩野美穂、細辻恵子訳) (by Fred Davis, *Yearning for Yesterday*, The Free Press)、京都、世界思想社。
- 成田 龍一 1998 『「故郷」という物語』、東京、吉川弘文館。